

「戦争と平和」との出会いと恩沢

—— 私の読書生活史から ——

村 井 万 里 子

一、高等学校時代をふりかえって

レフ・トルストイの小説「戦争と平和」との出会い、私の読書生活史にとって忘れられない思い出である。しかし、その出会いの基底をなしていた私の高校時代の読書生活は、けっして豊かなものではなく、計画的、調和的読書という面からも少しも誉められたものではなかった。大学入学後とときどき当時にふりかえってはざっとしたものだが、そういう中で救いであった「国語」の授業について、大学一年の夏休みに記した日記には、次のように書いてある。

「私の高校生活、あれはいったい何だったんだろう。」

国語の時間はたいてい楽しかった。ときにはおもしろくないたいくつな時間になりそうになつたが、私は先生のしゃべること、
「これは」と思うところはノートにかきまくった。聴いてかく」
これが私の勉強法だった。

私は非常に興奮状態に陥つたこともあった。胸がワクワクして押えようがない、ああいう感じだ。そういうとき、私がどんな顔をしていたか、自分では知るよしもないが、先生には私のそういう心の状態がわかつているようには思えなかつた——（どうかわか

らないが）

少し奇妙に聞こえるかもしれないが……私は国語の実力テストが好きだった。定期テストはあんまりおもしろくなかつた。授業でやった教材で、しかも、設問もワークブックからそのまま、なんていうのがかなりあつたからである。

しかし全県模試とか、その他の実力テストでは、私の全く知らない文章が出る。それを百分間、集中して読み、考え、味わい、そして最後には酔いしれた。テストに採用されるだけあつて、どの文章もたいてい、奥行きが深い、すばらしいものだった。その頃の私の読書が、勉強をほっぽり出して読んでいるという罪の意識につきまとわれながら、まるで追われるように字面を読みとばすというものだっただけに、私にとってテスト時間こそが、真の読書時間であつた。（実に、この事実気付いたのはたつた今である。）テストは文章こそ短かつたが、一流の先生が一流のものから抜粋しただけあつて、ハラのそこにズシンとこたえるものがあつた。

設問によって、私の読みの浅さがさらけ出されたり、段落に区切れとか、段落ごとに要約せよ、とかいう問いで、文章の構造の微妙さ、みごときにはっと気付かされたり、さまざまのちがつた

角度、観点からの考え方に世の中の広さを少しのぞきみたようなそんな気がしたりした。

そういう喜びがあったからこそ、私は捨てばちにならず済んだのかも知れない。どこかに、「まじめな」という面目を保っていたのかも知れない。

それでも、何とあの生活のまじりかたなことか（後略）」
昭和五〇年八月十三日 日記「誌す」より

この文章は、心の枷がはずれたことからくるかなりの興奮状態（大学入学後二年間は、自分でもどこかネジがはずれたかと思うくらい、うきうきしていた）の中で書きつけたのでそのことを割引いて考えねばならない部分もあるが、これを書いた当時は精一杯自分に正直に書いたつもりであった。「戦争と平和」とのめぐり会いは、こんな高校生活の中にとびこんできた。

二、「戦争と平和」との出会い

小学校の中学年頃から、時々怠けながらも、毎日几帳面に書くことと努力していた日記を、中学生になってすぐ、自分とつき合うことのつらさから、「こんな重苦しいものはもういやだ」と自ら日記の中に宣言して、「永遠に」放り出して以来、私はその時々思いの吐け口を、教科のノートの端や、メモ帳の類の余白に求めるようになり、それがいつのまにか使いかけの大学ノートへの書きつけになっていった。（大学入学後は、意識的に新しい大学ノートに書くようになり、「誌すⅢ」などと題名までつけるようになったが、この

ころは無意識的ならくがきだった。）今、その「らくがき」帳を繰ると、「戦争と平和」とのおかしな出会いが記されている箇所が見つかると、らくがきにしてみれば、「十二月二十六日」の日付が入っている。

それによると、私は、昭和四七年の十二月二十四日ごろ、（おそらく終業式のと町にとび出したのだろう）大分市の繁華街にある竹町晁星堂書店で、二冊の本を買った。そのうちの二冊が「戦争と平和」の第四巻だった。なぜ第四巻などを買ったのか、本当のところは忘れてしまったが、そのとき書店の棚には、第一巻、第二巻がなかったような覚えがある。私のゆきあたりばったりの悪い癖で、この小説が全部で四巻（新潮文庫）であることを確かめせず、何でもいいから衝突したい」という思いが強かったようだ。のちに、第三巻、第二巻を読んで、この小説に全く魅せられたときの「らくがき」には、「大部な書であると聞いて、一巻から順ぐり読むじれつたさから、四巻を手にしたのだった」などと書いているが、それも原因の幾分かではあったかもしれない。

しかし、第四巻を買ったことを記した「らくがき」に書いてあることは、二冊のうちのもう一冊の本への賛辞がほとんどで、「戦争と平和」そのものへの感想は一行も記していない。ただ、二冊ひっくり返ると、「きょうはどうれしい買い物のはしたことがありません」とあるだけである。しかしこれは、この本の印象が薄かったからではなく、実は、その内容が、その魅力と同じくらい理解困難であったからである。そこには、私がそれまで一度もぶつかったことのない、壮大なスケールをもった「哲学」がくり広げられていた。その

間にはさまれる、いわゆる小説らしいドラマの一節一節が、吸いこまれるような魅力をもっているのに、この「哲理」の部分は、生半可な理解をはねつけるかのように、いふし銀のような鈍い光を放っていた。その二つの部分の配合は、私にとって絶妙のリズムであつたらしく、ドラマの部分でかわきをいやし、たっぷりと味わい、哲理の部分では、無い知恵をふりしぼって格闘する、という一つのパターンが私の中にできあがつた。それは非常に新鮮だつた。

第四巻を読み終わったとき、私の中には、「ドラマ」を読み足りない物足りなさ、*「哲理」*がとうとう理解できなかつた、という不満が残つた。この二つの欲求を満たすために、私は何度か書店に足を運び、第三巻、第二巻と（おそらく、棚に出してきた順に）買ひ求めていった。いつも、第一巻がなくて、がっかりした記憶がある。もし、書店にそろっていたら、私は残り全巻を一度に買ひ、第一巻から一気に読んだことだろう。第四巻を初めて読んでからおよそ三カ月後の、昭和四八年の春休み（推定で四月一日ごろ）の「ら」がき」には、次のように書いてある。

「戦争と平和

私はこの小説を、奇妙な読み方をしてしまった。一卷から四巻まであるうち、四巻から読み始めたのだ。（四巻が最終巻とは知らなかつた。）大部な著であると聞いて、一卷から順ぐり読むじれつさから、四巻を手にしたのだつた。

この奇妙な読み方は、よみがえり、を起こさせた。

四巻は、物語の大切な人（アンドレイ公爵や老人たち、その他

の人）が死んでしまう場面である。戦争はもっとも激しい山場をむかえて、そして終着までいってしまふ。令嬢や、令息や、みなゆきつくところまでいってしまふ。

ピエールの捕虜生活は、私に強い感動をおこさせたけれども、これもゆきつくところまでいってしまつて、あとに私は、物足りなさど寂しさを感じて満たされない気持ちになつた。

あちらこちらには、はつと驚くほど輝いていたけれど、私にあまりわからぬ、過去をにおわせた人々々が、意味ありげに次々と亡くなつていくありさまは、私に何の興味もいだかせなかつた。

それから、三巻、二巻と読んで（二巻はきのう、徹夜に近き状態で読み終えたのだ）たくさんのことがわかつてきた。あの、死んでいく人々が、生き生きと活動しているのである。楽しんで、悲しげに。内面的闘争が、どの胸にももえさかっている。またひとり、またひとり、表面しかわからなかつた遠い人々が、急に激しい強さで深みをみせ、私をうれしさと悲しさでいっぱいにした。特にそれはなはだしかったのは、ナターシャとアンドレイ公爵だつた。私はナターシャの愛くるしさに目を見張つたし、アンドレイ公爵の優しさには慕わしきでいっぱいになつた。

非常に理知的で、そしていつも自分の心の理知的なものと闘っているアンドレイ公爵にも、心底からの喜びがやはりあつたのかと思つと、彼は悲哀に満ちた人と思われる。

「よみがえり」の感動があまり大きかつたので、今、書いてはみたけれど、あと一巻を残すのみの、ここに至つては、私がさかさから読んだことなど、もうどうでもいいことである。

私は、この書の人々が、非常に細やかで激しい情熱をもって描かれているのに驚嘆した。彼等の内には、私が限りないうらやましさを感じずにはいられぬ、世界中が愛の波に溢れている瞬間があったし、またそれを許された人々だと思った。あのように明確な、真剣な、思考というにはもどかしい、魂の遍歴ともいうべき理性的思考と、また、その理性のすばらしさ。私は考えてみると目がまわるような気がする。私は自分というものをちらと思いつかべたが、とてもいやな気持ちになった。あの人たちに比べて、少しも劣らぬ幸福と平和を、私はもっている。だるうに、私の内はあまりに貧しすぎる。あまりに貧弱である。私は生まれてこのかた、体で覚えたことは何もなかったし、安定を与えてくれる体験にも会ったことがない、要するに、私はからっぽである。そして悲しいことに——からっぽは、いつまでもからっぽだろうということである。

理由を書かないと、感傷的だと言われそうだから書く、ズバリ私は能力がないのである。あらゆることを理解する能力に欠けている。私はこれを書くのがイヤでイヤでしょうがないが、しかたがない。書かないとおさまらないのだ。

小説家たちが、自分の心の中をよく小説にあらわして、大衆に読ませているけれど、私は近頃、よくもまあ、あんなことができるともんだ、と思ひ始めた。世には先生、先生と呼ばれ一人とは談笑する——どんな苦しい心境を書いているときでも、それがもし、自分のほんとうの姿としたら……彼らはいったいどんな人間なん

だろう。不可解な、ほんとにわけのわからぬ人間である。「私はこんな悩みをもっているんです、又はもっていたんです。」とは、恐ろしく自信のある者しか言えない。そうだろう、彼らには自信がある。私にはない。

私は、自分を忘れて、一切、物語の中にとびこむことが、一番快いことと知った。どこにとびこんでいっても、すっぱりと入ってしまうのだ。泳ぎたいのに、水が足りない、というように、浅い、あざむくような軽薄な瀬はどこにもない。私は、チラリと、ドルストイという人の偉大さを感じた。綿々とした、あの独特の哲学的理論展開のところは、批評家たちは「あまりに執拗だ」と非難していたが（※注、「解説」による）、私にとっては、やはり知の輝きに満ちた深みと思われた。もっとも、落ち着いた、ゆとりのある気分で読まなければそういうふうにならず、何かから逃げ出そうと気紛らわしに読んだときは、何を書いているのか、さっぱりわからなかった。

その理論が、カタ、コト、カタ、コト、と正しくうつ時計の進行のごとくに動いてゆくと、いつのまにか、巨視的なパノラマのような眺めが与えられる。広大な平原を大きく迂回する軍隊の隊列、朝の光、硝煙、皇帝、宮廷、司令部が權威をもって描かれている。戦争の進展を克明に映し出し、あらゆる英雄伝の史書を嘲笑し、皇帝ではない、ナポレオンではない、廷臣ではない、司令官ではない、軍団ではない、士官ではない貴族ではないと、名を残した「あらゆる人の意志や命令が、いかに何もなし得なかつたかをあばき、ただ、それは、個人の、それも一番下の層の個人

の意志の総和なのだ、偶然なのだ、とあらゆる場で断言していく。有無を言わせぬ巨大なもの。胸を打たれて立ちすくんでいると、急に、あの必死な、美しい主人公たちの心の中に入ってきてしまうのだ。彼らは、優雅な貴族社会にあった。華やかさもあった。

その人々の心の葛藤の中に、最前の、あの、最下層の人々―兵士、農民、そんな人々が彼らに笑いかけ、「旦那、旦那」と呼ぶ。笑う。はしゃぐ。病みついたり、死んでいったりしてしまう。その死は：大量殺人ともいふべき戦争では、人間は頭数で数えられてしまうが、(そうしなければ残虐きわまりないからと思ふ)ここでは無教養ながら、魂と個性と優しさと怒りをもつて、ひとりひとり人間として生き、死んでゆくのである。その集合であるかのような大軍団は、あるいは避難民の群れ、農民の群れは、壮嚴を思わせた。

広大なロシア平原の雪、その冷たさの中に歩き続ける暖かい人の血の脈うつ人々。私はその中に陶醉してしまった。私は、この本をこの上ないものと思った。いつも持っていたい。いつ開いても吸いとってくれそうだ。

例の理論だけは、日本の歴史などを考えているとどうしても頭からは信じきれないがこれもトルストイなら、一笑に付すであろう。しかし、この戦争においては、この理論はまちがいない、そう思わざるを得ない。でも、理論など、何も妨げにはならない。あの、無限の広大な世界にすっかり身を寄せてしまって、悲しい、美しい、暗い、楽しい、喜ばしい、寂しい、不可思議な人生とい

うものを、私をぬきにして、息をひそめてそっと考えること。この喜びは、どんな人にも訪れるだろうし、誰にも奪われもしない、と私はこの陶酔だけに没頭している。

―後記、この作品を読んだ方が、私のこんな何が何だかわからぬ文をみるよりおもしろい。―

(注、表記上の誤りと、表現上の不適切箇所三箇所とを訂正。

他は原文のまま)

私が、本当に「戦争と平和」に出会い、そのふところに吸いこまれてしまったのは、第三巻、第二巻を読んだこの時期である。この文章は、「後記」にみえるように書いた当初から不満だったらしいが、今読み返しても、気持ちばかりが先走っているのが感じられる。今ならもう少し丁寧に書けるかもしれないが、そうすると、当時の感想でないものがまざってきそうなのでやめた。

自己嫌悪病が慢性化して、文中ずいぶんひねくれて響く箇所もある。これを読むと、当時の気持ちをかなり鮮明に思い出せるだけに、「自分が死ぬまでは絶対に日記やら、こういう類の文章は誰にも見せない」と考え、また文中にも書いている自分が、今、それをこんなにさめた目で見据えようとしていることは驚異である。自分は「回復」したのか、墮落したのかよくわからない。そのころからさかんにふきこまれた「青春期特有の悩み」という言葉に、ひそかに、そして激しく反発していたことを思うと、これらの文章を、「これが私の青春でした」としてすました顔で言うことは、自分の「青春」に対して恥ずかしい。一方では、大人気ないな、と思いな

がらも、である。

こうして、第二巻まで読んでしまうと、もう、第一巻が読みたくてたまらなくなつた。何度めかに、書店の本棚に第一巻を見つけたときのうれしきは、今も心のどこかに、ある種の痛みのようなものとして残っている。

私は、四―三―二という順序で読むことによつて味わたつゝよみがえり、感に満足して第一巻を手にとる前に、もう「戦争と平和」の全体像がつかめたような気がしていた。ただ、ストーリーの穴を埋めたいがために、第一巻に恋い焦がれた、といつてよいかもしれぬ。具体性には乏しいが、感覚的には鮮明にもつていた第一巻の予想イメージは、しかしみことにはずれた。登場人物の年令が若いであろうことはわかっていたつもりだが、年令のちがひ以上に、その精神も質的に大きくちがっており、私はその若々しさに驚嘆したのである。それは、主要人物だけでなく、終わりの方ではほんの少しづつしか顔を出さなくなる人物についても同じだった。私はそれまで、「物語」の中では、幸せになつたり、不幸になつたりの場合の変化はあつても、人物の本質の性格はあまり変化しないもののように感じていた。だから、全巻を通じて同一人格としての太い線は貫かれつつも、同時に個々人の精神が、これほど必然的な、みごとに變化の軌跡を描いていくことは、想像もしていなかつた。自分な變化の軌跡を描いていくことは、人間がこんなに大きく「変われない」苦しさに悩んでいた私は、人間がこんなに大きく変わっていくことに目を見張つたのである。ここではじめて、私は作者トルストイが物語の中の時間を浪費しないで、どんなに一人一人を愛しぬき、育てぬいたかを知り、この小説の「底の知れなさ」

を感じて戦慄した。このころから私は、「戦争と平和」に対して、崇拜に似た気持ちを抱くようになったと思う。

三、「戦争と平和」からの思沢

第四巻からさかのぼつたという奇妙な読み方は、私の気まぐれと偶然の産物であるが、もし私がこの順序でこの作品にふれなかつたとしたら、私にとつての「戦争と平和」は、ずいぶんちがつたものになつていたのではないかと思う。もし、一巻から順序よく読んでいたら、私は、人々のいのちと心の変化にあれば大きな衝撃は受けなかつただろうし、第四巻の「哲理」は面倒くさくてほうり出したにちがいない。おそらく「崇拜」するほどには深く引きこまれなかつただろう。「偶然」として片付けるにはあまりにも重い、私にとってはかけがえない偶然であつた。

大学入学後も、この本は私と共に、何度か下宿と故郷とを往復した。しかし、いったん読み始めると、どこからであろうと第四巻までいかなないと止まらない、という病から抜け切れず、ある休暇明け意を決して三巻までを自宅に残し、第四巻だけを広島の下宿に送り返した。例の「哲理」はまだ真底わかつた気がしなかつたし、ドラマと哲理の快いリズムは私のよきペースメーカーになるだろう、と思つたからだつた。

教養課程の二年間、私は本当に好きな講義を選んで聴けて、考える時間がたっぷりある、という楽しさを満喫していた。その中で、何か生産的な（と自分には思える）考えが浮かぶとき、それらはしばしば「戦争と平和」の全体像や諸断片と結びついて心の中に現わ

れてくるようになった。

例えば、入学後の雑記帳「誌す」には、次のようなものがひろえる。※は現時点での注である。

○結びつける—大学入学時の私の抱負だった。

「結びつける」ということば、どうしてこういういろいろなところに出てくるのだろうか。

「結びつけることだ、そうだ結びつけることだ」

※正確な引用ではない。

ピエール伯爵の夢中独白

「戦争と平和」トルストイ

「結びつけなさい。結びつけないと脳のすきまにいつも風が吹いているからかんたんにとんでいってしまう。」

末松省一（上野丘高 英語教諭）

※この先生の授業中の口癖だった。

「一個人のためでなく、自分の名を歴史の中に結びつけること

……」

エイブ・リンカーン（吉野源三郎訳）

昭和五二年 六月十二日 抜粋

○「言語行為」の重さの実例

「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと—四領域それぞれに、独自の重要な役割がある。それぞれに、深いモラルが宿っている。

・発言すること又はしないこと自体にやどる高いモラルの問題

1 「戦争と平和」での場面

シエングラーパーベンの戦いで、ロシア軍は大きな損失をこうむりながらも、勝利をおさめた。激戦の終わった夜、参謀本部に集まった将校、将軍たちが、戦果の報告をしあった。そこには、戦勝という事実のもとに、ウソの発言であろうと、軍の名譽を高めるようなウソならば、黙認される、という空気がみなぎっていた。

将校たちが次々に自己の部隊、部下、そして自分自身の働きを興奮してしゃべり合っていた。 ※以下要約する。

司令官が、「こうして中央の陣地に砲二門を捨ててきたのかな」と尋ねる。戦闘の終わり近くに、後退命令を伝えるにその陣地に派遣された当直将校の答は、（他の人よりは軽いが、幾分かのウソが混っていて）いまひとつはつきりしない。（実は彼は、激しい砲弾に怖気づいて、後退を見届けずに逃げ帰ったのである。）砲兵陣地を指揮していたトゥーシン大尉という気のいい士官が呼びつけられる。彼は、司令官の問いに、すっかりあがってしまったのと、真実を言えば義務（後退を助ける役目）を果たさなかった他の部隊の隊長をおとし入れることになる、という気兼ねから、満足を返答ができなかった。当直将校のすぐあとに、同じ後退命令をもってトゥーシン大尉の陣地におもむき、砲の撤収作業まで手伝ったアンドレイ公爵は、この様子を見るに見かねて口を開き、自分のしたことは言わずに砲の状況と、その活躍ぶりを胸のたかぶりをおさえながら話す。トゥーシン大尉はようやく放免されるがアンドレイ公爵の言葉は結局、

当直将校のウソをあばくことになり、一座は気まずくなる。アンドレイ公爵は、自分の思い描いていた「英雄的行為」はこんな結果しかもたらさないのかと憂鬱な気持ちになって、急いでその場を離れていった。(※「戦争と平和」第一巻第二部)

この部分は、「言を發す」とはどういうことなのかを端的に示す良い例として使えるだろう。このように一見むなしく、力なく見える發言だが、その内実には正義という高いモラルがやどつていて、アンドレイの魅力を雄弁に語る。正義のためには、それは發言されねばならなかったが、状況を判断しうる。こんな人間には、あまりふさわしくない發言だったのである。發言には、必ずある種の「枷」が存在する。この話のような場合もあり、実利上の損得の場合もあり、もっと多く、恥ずかしい、という場合すらある。人目を気にしたり、うまく言えないだろうと危ぶんだり、とにかくさまざまな圧迫を押しつけて、まず一声、声を出す、ということは、その場にとって、とりわけその人間にとって、どんなに大きな意味をもつかしめない。

(2以下略)

昭和五三年 四月十五日 抜粋

また、あるときは大学で聴く講義と結びついて、抽象的な論が肉体化され、印象鮮明なものとして実感できるようになったり、それが元になって期末レポートの材料になったりした。ストーリーもさることながら、「戦争と平和」の人物造形とその描写のしかたはすばらしい。第四巻の巻末の「解説」(工藤精一郎氏)に、

「世界の作家の中で、人間の描写の無限の広がりをもつのはシェイクスピアとトルストイであると言われている。「戦争と平和」に登場する人物は、全部で五百五十九人であるが、主要人物はもちろん、ほんのちよつとしか顔を出さないような人間まで、写實的に、正確に、個性的に、実に生き生きと描かれている。」

と書かれていることは、私にも実感できた。なぜこんなことが可能なのか、その秘密が解き明かせたら、こんなすばらしいことはないと思う。この一例を、ボロジノの会戦のあった夜、ピエールにござた意をくれた一兵士にとり、「文学概論」のレポートに書いたことがあるが、うまくいかなかった。将来に向けての魅力的な課題の一つである。

三年生の前期には、専門科目の授業をひとつ犠牲にして、「言語行為論」という授業をとった。非常に感銘が深かったので、同じく感銘深かった「戦争と平和」に、何とか「結びつけよう」と一生懸命考えてみたが、当時はどうしても、直接には結びつかなかった。卒業論文を書く中で、言語行為としての「対話」の大切さに気付かされてから、ようやく近ごろ、「戦争と平和」には珠玉のような「対話」が散らばめられていることに気がつき始めた。なかでも、親友同士であるアンドレイとピエールの、そのときどきの心の交流を遺憾なく表現している、一卷、二巻、三巻、それぞれ一つずつの対話 はみごとである。特に、第二巻の「夕方の渡し場」での対話は、作者トルストイがその節の結びで述べているとおり、アンドレイにとって、一つの「精神的エポック」であった。アンドレイはこれによって精神的に若返り、積極的に生きる希望にもえはじめ、やがて、

全篇中でも最も美しい場面であるナターシャとの恋愛につながってゆく。親友同士の対話として、これは、一つの典型であると思う。

第三巻の、アンドレイが負傷を負う前日に、ピエールが戦場に訪ねていったときの二人にとっての最後の対話は、互いに互いを突き放して、それがかえっていたましい哀感をそそり、二巻での対話ときわだった対照をなして、劇的效果を高めている。

また、第四巻に現われる、ナターシャとピエールとの再会での二人の対話もすばらしい。ここでは、ナターシャは、ピエールが捕虜生活で育んだ清らかで美しいものを、ひたすら「聴く」ことに没頭した。ナターシャは、「聴く」ことによって、「本当の女性だけが与えることのできる喜び」をピエールに与えたのだった。

夫婦になってからのピエールとナターシャの会話描写も精彩があつて、意味深長である。

細かく見てゆくほどに、「戦争と平和」は美しい対話、冷たい対話、悲しい対話など、あらゆる対話の宝庫である。

四、今年一年をふりかえって

大学に入学したのち、「戦争と平和」の次に読んだトルストイの作品は、「クロイツェルソナタ」だった。重苦しい物語で、読んでいると気が迷入ってくる。次に、「アンナ・カレーニナ」を読んだが、これもやっぱり重たい。「戦争と平和」の、あの壮大なロマンはここにはない。

同じ罪の重さを追求したもので、ドストエフスキイの「罪と罰」の方が、まだ読みやすいように思う。この方が、主人公が苦惱しな

がらも「戦争と平和」での主人公達のように、自分の内部を見つめながらぐいぐい変わって行って、最後には救われもするので、読みながら涙が流せ、その分だけ潤いがある。

「戦争と平和」に出会った高校生当時、私はこの美しく広大なロマンの中にどっぷりつかり、それによって自分の渴きをいやした。そのとき、これを書いたトルストイは、私にとってほとんど「絶対」の人だった。これは、トルストイに対する全幅の信頼であると同時に、そこからのちを汲みとった自分への静かな肯定感でもあったと思う。そこにさえ帰ってゆけば、ちょうどふるさとに帰るように、私はいのちがふきかえせる、どんなにゆきづまったときでも、力を与えてもらえる、という信頼と自信だった。

それが、トルストイの他作品を読むことによって、あの「戦争と平和」を書きえた人間が、まだ「アンナ・カレーニナ」の苦惱をえがき、「クロイツェルソナタ」の暗黒をえぐり出さねばならなかったのかと思うと、悲しいことに、「戦争と平和」がじわじわと私の中で相対化され始めるのを感じた。

昭和五十四年の卒業と同時に全四巻を自宅にもちかえった私は、この一年、「戦争と平和」から知らぬまにずいぶん遠くなっていたように思う。それが先日（昭和五五年一月十一日）、授業の場で、野地先生から出席者全員に、「私にとってのこの一冊」をあげなさい、との課題をいただき、「戦争と平和」にのめりこんでいた以前とはちがった立場から、「戦争と平和」に魅惑され、目覚まされ、やがて相対化されつつあるこの小説とのつき合いをふりかえる機会を与えられて、当時の感動が鮮かに甦り、本当に嬉しかった。

ピエールとアンドレイの「渡し場の場面」をつたない言葉で説明しながら、私は、体の芯の方からガタガタふるえ出すのを感じ、終わりまでいかないうちに歯の根が合わなくなってしゃべれなくなるのではないかと自分で危ぶまれるほどだった。

私は、何の誇張もなしに、これが私の青春を救った本の中の一篇であるといえる。今でも、私の中で、理想的小説像の一つの典型として、厳然として生きている。

源氏物語を読んでも、夏目漱石を読んでも、私は、どこか心の片隅で比べている。その値打ちは別として、日本流の「私小説」と対置する形で、いつも、「西洋流の本格小説」として、私の中にこの作品がすわっている。

この小説は、磁石のようにさまざまのものを吸い寄せてくれるので、私に与えてくれる恩沢ははかりしれない。もっとも、私自身もこの巨大な磁石に引き寄せられた小さなごみであるようだが。これから先、どれだけのものをここから汲み上げうるか、予測はつかないけれども、いつまでもつきあい続けたい本、教えを乞いたい本であることは疑いない。

引用文中の※は、この文章を書いた時点での注記である。

(本学大学院教育学研究科)